

JAPAN PRIZE NEWS

財団法人 国際科学技術財団

THE SCIENCE AND TECHNOLOGY
FOUNDATION OF JAPAN (JSTF)

〒105 東京都港区虎ノ門4丁目3番20号

神谷町森ビル4階

電話 03(3432)5951(代) Fax 03(3432)5954

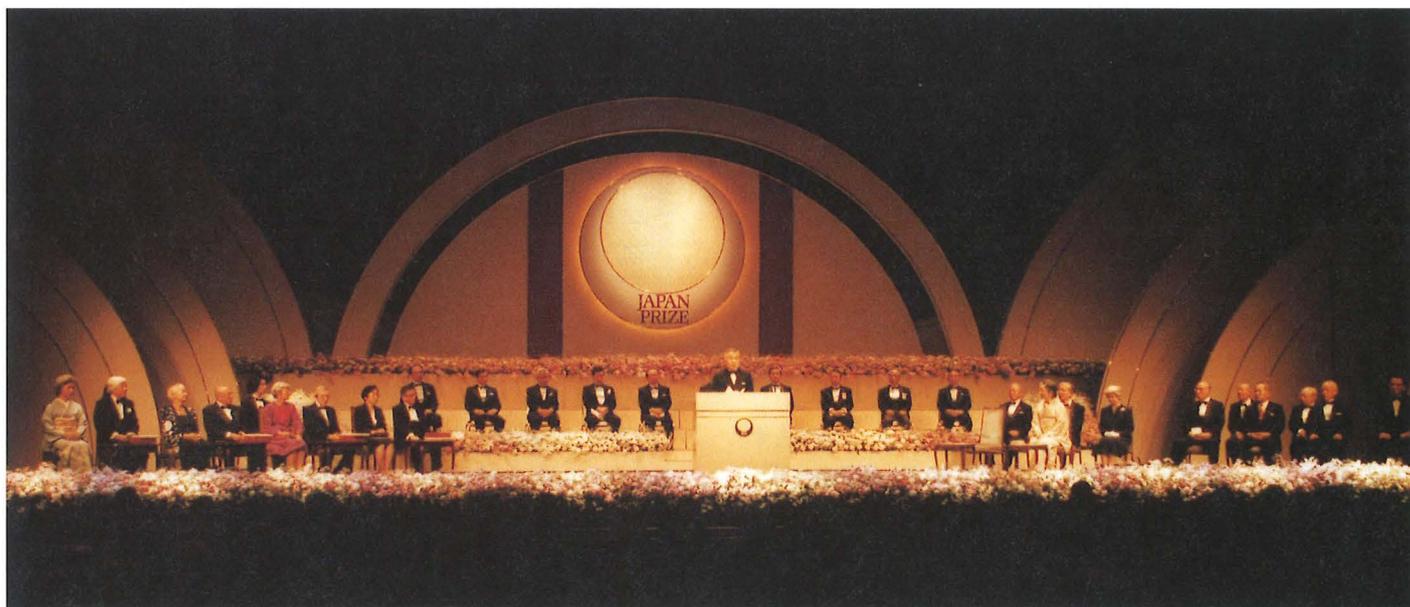
URL <http://www.meshnet.or.jp/jstf>

E-Mail jstf@mx.meshnet.or.jp



No. 18
1997年6月

1997年(第13回)日本国際賞、日米の4博士が受賞 天皇皇后両陛下をお迎えして授賞式



1997年(第13回)日本国際賞の授賞式が4月25日(金)、東京・国立劇場において挙行されました。今回の受賞者は「医学におけるバイオテクノロジー」分野で杉村隆博士(日本、71歳。国立がんセンター名誉総長、東邦大学学長)とブルース・N・エームス博士(米国、68歳。カリフォルニア大学パークレイ校生化学・分子生物学部教授)。また「人工環境のためのシステム技術」分野ではジョセフ・F・エンゲルバー

ガー博士(米国、71歳。ヘルプメイト・ロボティクス(株)取締役会長)と吉川弘之博士(日本、63歳。前東京大学総長)の4人です。

日本国際賞は、財団法人国際科学技術財団(理事長:近藤次郎)が、世界の科学技術者を対象に、科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の平和と繁栄に著しく貢献した人々を毎年顕彰するもので、1985年の第1回から数えて今年で13回目の授賞となります。



杉村 隆博士



ブルース・N・エームス博士



ジョセフ・F・エンゲルバーガー博士



吉川 弘之博士

授賞式



天皇皇后両陛下の祝福を受ける4博士

授賞式は天皇皇后両陛下をお迎えし、伊藤宗一郎衆議院議長、齋藤十郎参議院議長、三好達最高裁判所長官、小杉隆文部大臣、在日外国大使ならびに官界、学界、財界、ジャーナリストなど約900名が出席して行われました。

東京フィルハーモニー交響楽団が演奏する「日本国際賞式典序曲 - Overture Japan」で開幕となり、近藤財団理事長兼日本国際賞審査委員長の開会の挨拶、審査結果報告および受賞者の紹介、審査委員会各分野部会長による贈賞理由の説明に続き、4人の博士にそれぞれ賞状、賞牌および賞金(1分野5千万円)が伊藤正己財団会長から贈られました。

受賞後、4人の博士は次のように挨拶されました。

「現在は約半数のがんが治りますが、がんがDNAの病気であることに基づき、世界で新しい研究がとうとう進んでいます。DNAの病気であることに基づいて、がんの予防、診断、治療が進むと期待されます」(杉村博士)。

「私の研究が多少なりとも日本人の健康促進に役立っているとすれば、この日本という素晴らしい国が私にくれた喜びに対する恩返しをさせていただいていると思っております」(エームス博士)。

「このたびの私の日本国際賞受賞は、高齢で家から出られない人々の召使いとして奉仕するロボットを開発する原動力となることでしょう。間違いなく、日本ロボット工業会も同じ目標に向かって一緒に進んでくれることでしょう」(エンゲルバーガー博士)。

祝宴

授賞式終了後、同日夜、東京・ホテルニューオータニ「芙蓉の間」において天皇皇后両陛下ご臨席のもと、各界約230名を招いて、祝宴が催されました。



祝宴風景

伊藤財団会長の挨拶で始まり、ディナーのあと、受賞者4博士の栄誉を讃えて天皇陛下より乾杯のご発声をいただきました。続いて三権の長を代表して三好最高裁判所長官から乾杯のご発声をいただきました。また、日本国際賞のますます

天皇陛下のおことば



第13回日本国際賞の授賞式に当たり、杉村博士とエームス博士が「医学におけるバイオテクノロジー」分野において、エンゲルバーガー博士と吉川博士が「人工環境のためのシステム技術」分野において、それぞれ受賞されましたことを心からお祝いいたします。

杉村博士とエームス博士の御研究は、がんがDNAの変化により起こる病気であるという基本概念の確立に、また、エンゲルバーガー博士と吉川博士の御研究は、ロボットによる病人や身障者の介護など将来技術の在り方、技術開発の目標及び方法論の提示など、システム技術の実現に、それぞれ大きく貢献してきました。ここに、四人の博士の優れた御業績に対し、深く敬意を表します。

今日、科学技術の進歩は誠に著しいものがあります。その進歩が世界の人々の健康を増進し、環境を良好に保ち、人々に幸せをもたらすことに資するものであるよう切に願っております。この意味において、受賞者の御研究は極めて意義深いものと思われまます。今後ますます御研究が実っていくことを期待しております。

日本国際賞が科学技術の発展に一層寄与することを願い、授賞式に寄せる言葉といたします。

「近年、製造技術は大きな進歩を遂げ、基礎的学問領域の成果を応用する場として発展してきました。しかしこれらの知識だけでは製品を作り出すことはできません。そこには固有の人間の思案と行為があり、それがつくることの必要条件です。それを研究の対象にすること、それが一般設計学であり、人工工学であります。今回の名誉ある受賞で、この領域に一つの光が当たったのだと考えることをお許しいただきたいと思っております」(吉川博士)。



乾杯のご発声をされる天皇陛下

の発展と世界の平和と繁栄への寄与を祈念して、小杉文部大臣のご発声による乾杯が行われました。続いて在日外交団を代表してベルギー王国大使のパトリック・ノートン男爵による祝辞、さらにローレンス・グリーンウッド・ジュニア米国臨時代理大使による祝辞が述べられました。

その後、各受賞者が希望された曲を千葉大学・宇都宮大学混声合唱団が合唱、和やかな雰囲気の中で杉村博士、エームス博士、エンゲルバーガー博士、吉川博士の順で謝辞が述べられ、華やかな祝宴は終宴となりました。

JAPAN PRIZE

受賞者の思い出のアルバム

杉村博士



お仲間と軽井沢でくつろがれ、昆虫採集を楽しむ博士。



学会でローマへ。奥様とのスナップ。(1970年)



アメリカ、ゼネラル・モーターズ癌研究基金モット賞受賞後のお祝いの会で颯爽たる仮装を披露。(1981年)

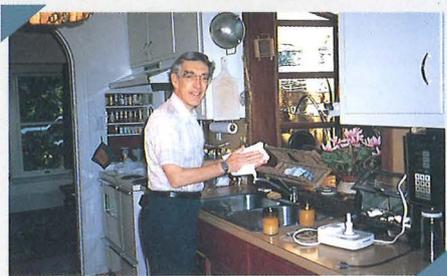
エームス博士



今回の共同受賞者、杉村博士を自宅に迎え、昼食を共にされた時の和やかなひととき。(1987年)



自宅でのご夫妻。壁には日本の版画。カーテンも日本の生地を使用されているそうです。



時には台所で腕をふるわれます。お味の方は …。

エンゲルバーガー博士



博士12歳…お父様に負けない堂々たるポーズです。



大のヨット好き。愛艇「Rights of Man (男の特権)」で、舵を取られる博士…。



レーガン大統領に外科医を助けるロボット技術について、説明をされました。(1985年)

吉川博士

幼少の頃お姉様とバツタを追う。(東京・代々木原)



毎年恒例の、研究会の合宿です。



IMS (Intelligent Manufacturing Systems) の5極代表として。

JAPAN PRIZE



日本プレスセンターでの受賞者合同記者会見(4月22日)



京都の休日(4月27日)



内閣総理大臣表敬訪問(4月23日)



受賞者歓迎レセプション(4月23日)

日本国際賞週間

(財)国際科学技術財団では4月22日(火)から28日(月)までを「日本国際賞週間」とし、授賞式・祝宴のほか、内閣総理大臣表敬、日本学士院訪問、記念講演会を開催するなど各種行事を行いました。



学術懇談会(4月26日)



米国大使館主催パーティ(4月24日)



日本学士院訪問(4月24日)



記念講演会(4月24日)

1998年(第14回) 日本国際賞審査開始

1998年(第14回)日本国際賞の授賞対象分野は「新材料の設計・創製と機能発現」と「農業生産のバイオテクノロジー」の2分野です。

現在、当財団に世界各国の有識者から受賞候補者の推薦状が多数寄せられています。財団に設置される1998年(第14回)日本国際賞審査委員会審査を経たのち、受賞者の発表は本年12月、授賞式は来年の4月を予定しています。

「新材料の設計・創製と機能発現」

近年、原子・分子レベルで新しい構造を持つ物質・材料を設計・創製する手法が開拓され、これによって新しい機能・物性の発現や特性の著しい向上が図られるようになり、科学技術の進歩に大きく貢献しています。

1998年の本賞は、このような「新材料の設計・創製と機能発現」の分野で根幹的な貢献をし社会的インパクトを与えた者を授賞対象とします。

「農業生産のバイオテクノロジー」

環境保全型の持続的農業生産は、今後、特に途上国を中心とする世界人口の急激な増加への対応を迫られるようになるでしょう。この問題の解決のためにバイオテクノロジーの展開が大きく期待されます。

1998年の本賞は、上記の問題を解決するための農業生産のバイオテクノロジー分野における優れた研究を対象とします。生産物の収量、品質、抵抗性等を改良するための遺伝、育種、栽培技術に関係するバイオテクノロジーおよび輸送、貯蔵、加工中の損失や品質劣化を軽減するためのポストハーベストバイオテクノロジーを含むものとします。